

Educo

No.42
2017年冬



新実 徳英さん

作曲家

巻頭インタビュー p.2

知っておきたい教育 NOW p.4
道徳の教科化と道徳的行動
「考え議論する道徳」の具現のために

きょういく見聞録 p.8
『耕人塾』で中・高校生の「人間力」を磨き、
地域や社会に貢献する人材育成

地球となかよしトピックス p.10
命を守る教育

「いじめを、しない！させない！ゆるさない！」
辰沼キッズレスキュー隊
一子どもたちによるいじめ防止活動一

Information 北から南から p.12

第14回 地球となかよしメッセージ入賞作品発表 p.14

地球となかよしゼミナール p.18
森を食べる植物～腐生植物 数々の謎

コラム p.19
高大接続改革について
～新テストなど大学入試改革を中心に～

ほっとな出会い p.20
NPO法人 アール・ド・ヴィーヴル
理事長

萩原 美由紀さん

生きることが音楽

東京音楽大学客員教授
作曲家 | 新実 徳英さん

気がついたら頭の中は音楽のことばかり

ぼくは4歳から11歳頃まで、ヴァイオリンを習っていました。パッハなどの曲を弾き、気づかないうちに古典に親しんでいたのです。いつの間にか絶対音感も育っていて、ヴァイオリンが自分の中の筋になっていることに、あとで気づきました。

高校入学後にコーラス部をのぞいたら、「自分の声がほかの人の声と調和するのはなんて楽しいんだろう」と、コーラスの虜になってしまい、高校2年になると自分で指揮をしたり、曲のアレンジをしたり、気がついたら頭の中は音楽のことばかりでした。

藝大に行こう

父が機械を扱う商売をしていたので、高校卒業後、ぼくは跡継ぎのつもりで東大理Iに入学しました。ところが3年になって機械工学科進学直後に東大紛争が始まり、授業が半年間なくなってしまったのです。休校中に下宿の近所の貸しピアノ屋で毎日ピアノを弾いているうちに、東京藝術大学に行こうと決めました。当然、父は大反対しましたが、最後に「東大の卒業証書

を持つてこい。そうしたら藝大にいる間は面倒を見てやる」と言われたので、我慢して卒業証書もらい、1年受験勉強をして藝大に入りました。

多くの音楽会などに、両親はよく来てくれました。ある時、ぼくの作品個展に両親を連れて行き、帰りに「お父さん、あの作品わかった？」と聞いたたら、「ん？ ようわからん」と一言。でも内心喜んでいたでしょうね。いろいろ支援してくれた母はまっすぐに喜んでいました。

人間の根源に触れる作品を

作曲する時はいつも苦労します。何とできない時は少し時間を置き、曲が浮かんだらすぐ作ります。そして完成すると、それまでの苦労は忘れてしまいます。どんなスタイルの曲であれ、作曲する時は、いつも「根源的」ということを思います。人間の精神にどこ



PROFILE 東京大学工学部卒、東京藝術大学、同大学院修了。オペラ「白鳥」、管弦楽曲「風神・雷神」ほか多数は国内外で演奏されている。「協奏的交響曲エランヴィタル」で尾高賞受賞。ほか中島健蔵音楽賞、文化庁芸術大賞など。室内楽、邦楽、声楽、合唱曲など多数。東京音楽大学客員教授。

まで奥深く入り、根源的なものをキャッチできるか？ それがかすべてだと思うのです。音楽は精神の糧ですから、根源に結びつかない音楽は希薄だと思います。

また、創作者は同時に批評者でもありますから、書いている作品を見直して「これは本当のものではないな」と本気で思ったら、それまでの部分は捨てます。でも本当のものだと思う時は、作品のその先が出てくるまで待ちます。また、複数の仕事を抱えていますから、いくつか先の仕事まで頭の中にイメージして、一つの仕事が終わったあとに自分が燃え尽きないようにすることも必要です。

『A.E.』

昨年、『A.E. あるいは希望をうた



うこと』というエッセイ集が出ました。A.E.とは「After the Earthquake(震災後)」の略称です。東日本大震災の記憶を風化させないという願いを込めて、各曲に番号をつけました。編集者

がそのA.E.をタイトル化したものです。震災後、今も苦しんでいる多くの人たちがいます。音楽がその状況を救えるとは思いませんが、「音楽の力は微力ではない」とも考えるのです。音楽は人の心に勇気や希望を与えることができますのではと思って作品を書いています。怒りをもって書いたものもあれば、鎮魂や救済を願う希望を込めたものが中心になりました。また純粹に音楽のおもしろさを追求したものもありますが、震災後、数年経つまでそのような曲は書けませんでした。いつも被災地のことが頭の中にあつたからです。

『黙礼スル』

先日、合唱団「樹の会」の人たちが、多くの合唱作品の個展を開いてくれました。前半は震災前の曲で、後半は和合亮一さんの詩『黙礼スル第一番、第二番』の演奏でした。この作品は死にゆく人たちの気持ちや、祈りや鎮魂する気持ち、そして「新たな希望の光を見つけよう」という気持ちを込めたものです。45分の超大曲ですし、テーマが重いので、歌う方も辛いのですが、全5章では見事に歌い上げてくれました。テキストや音楽の力を、歌っている人たちも会場の皆も受け取ったと思います。

感動とは喜び

震災後、『黙礼スル』を含め、ぼくは和合さんの詩で『つぶてソング』と『決意』、そして震災後の日常風景を歌った『ふと口ずさむ』などを書きました。未曾有の震災を音楽作品の形で残すことが大事だと思ったのです。

合唱の現場では、みんな音楽の力を味わっていて、それが合唱の魅力でもあります。ある荒れた中学校の先生が、ホームルームの時に皆で歌うようにしたら、クラスが落ち着いてきたと聞いて

たこともあります。

音楽に感動できる人は、大人も子どももよく成長できると思います。だって、感動することは喜びなのですから。喜びを知っていると、何かあってもその先を見つけれられます。何かをすばらしいと思えば、その喜びを心にもっている子どもは絶対に大丈夫だと思えます。教育とは、そういう喜びを見つけてあげることです。それを通じて一人一人のいろいろな良いところ、得意なところをどんどん伸ばしていけたらいいなと思います。

具体性と科学性

何かを指導する時には、観念論ではなく具体性が必要です。例えば「わたし」と歌う時に「わ」はどう発音するのか？ 子音や母音の発音の仕方により言葉の表情や聞こえ方が変わります。

好奇心があることも大事ですね。年齢に関係なく、自分が好きなものを大事にしたらいと思うのです。

もう一つ、原理的なことを伝えるのが一番大事です。例えば、月、地球、太陽がどういう位置関係の時に満月になるのか？ そういう根本のことを教えてあげることが大切でしょう。

「なぜだろう？」と 思う心

大事なのは、「なぜだろう？」と思う心をもつことです。子どもの頃から、頭の中を暗記式ではなく記述式にしておく。そして子どもが「なぜ？」と聞いた時に、大人が答えてあげる。物事の本質をいつも問うように育ててあげられたらいいなと思います。

去年、鎌倉芸術館で第17回「白いうた青いうたフェスティバル」が行われました。最後の中学生80人が歌い終わってからは、ぼくが舞台上で彼らにいろいろ質問しました。そして「君らの歌はとても良いけど、顔が怖いぞ」と言ったら、彼らもわかっていて、「じゃあもう1回歌おう」と言ったら、みんな目を輝かせて歌っていました。素晴らしい変わりようでした。

色紙を求められることがあります。が、「生きることが音楽」と書くんです。「音楽」と「生きること」は同じことだと感じていたからです。

子どもたちの目が、輝くようにしてあげてください。

道徳の教科化と 道徳的行動



上越教育大学 副学長
林 泰成

道徳の教科化

道徳の時間は、平成30年度から、「特別の教科 道徳」として教科化される。そのことについては、すでにさまざまな形で情報が出ているので、教育委員会、教育センターや各学校では、教科化に向けて研修会を実施するなどの準備が始まっている。

今回の教科化では、文科省は「考え議論する道徳への転換」というスローガンを使っている。したがって、これまでのように心情主義的な道徳授業だけでなく、討論を通して道徳的価値を学んでいく授業スタイル、すなわち「問題解決的な学習」

も取り入れられるようになっていくだろう。

この「問題解決的な学習」は、教科化に向けて改正された学習指導要領にもすでに記されている用語であるが、もう一つ、学習指導要領には「道徳的な行為に関する体験的な学習」という表現も取り入れられている。

道徳的な行為については、これまで道徳の時間に行うべきものではないとされてきた。道徳の時間は、基本的には座って学ぶ時間であり、子どもたちに道徳的価値を学ばせ心を育てることが求められていたのである。

今回、文科省は、スローガン

には入れなかったものの、この「道徳的な行為に関する体験的な学習」という表現を学習指導要領で用いた。このことは、今回の教科化を実現させた最初の提言と強く関係しているように思う。

いじめと道徳的行為

今回の教科化は、平成25年2月に出された教育再生実行会議の第一次提言から始まったとみることが出来る。その提言は、「いじめの問題などへの対応について」と題するもので、5つの提言から構成されていた。その1つ目が道徳の教科化に関する

るもので、「心と体の調和の取れた人間の育成に社会全体で取り組む。道徳を新たな枠組みによって教科化し、人間性に深く迫る教育を行う。」と記されている。

2つ目の提言は、法律の制定であったが、それよりも先に道徳の教科化が取り上げられているということは大変興味深い。いじめ防止には、それだけ道徳教育に大きな期待がかけられていると考えられるからである。

しかし、従来の道徳教育は、そんなに即効性があるものだとは考えられてはいなかったように思われる。だからこそ、「1時間の授業で道徳性の変化を見とることなどできない」などと言われていたのではなかったか。にもかかわらず、いじめ対策の一つとして大きな期待がかけられ、それを実現させるための方策を考えたととき、具体的な行為や行動へとつながることが求められることになったのではないか。いじめは、あえて言うまでもなく、人権侵害行為である。目の前で起こっているとすれば、すぐにでもやめさせなければな

らない。心は育ったけども行為には移せないというようなことでは、いじめに対する解決策として道徳教育は十分なものではないと言わざるをえないことになってしまう。

道徳教育の内容

道徳教育では、その内容として道徳的価値を教えることになっている。しかし、そこには、さまざまなものが雑多に含まれている。それは、複数の道徳的価値があるということでもあるし、一つの道徳的価値にさらにさまざまな中身が含まれているということでもある。さらに、個人レベルの生活習慣から社会的慣習や法的なもの、自然環境や人間の力を超えたものへの畏敬の念まで、カテゴリーレベルの異なるものが十分なレベル分けなしで含まれてもいる。

こうした状態にあるということは、道徳教育に大きな混乱を来たすのではないか。

たとえば、挨拶は、人間関係の潤滑油として、できるに越したことはない。しかし、命を大

切にするという内容と比べれば、できなくてもそう大きな問題ではないように思われる。だから、授業でも、挨拶できなかった自分を取り上げて、なぜ挨拶できなかったのか、挨拶にどんな意味があるのか、挨拶をしたときされたときどんな気持ちになるのか、そうしたことがらを級友と議論することだってできる。

けれども、いじめについて同じことができるだろうか。もちろん、議論していじめをしてはいけないということをしつかり納得させることも大切だろう。だが、その前に、たとえ加害者が納得していなくても、目の前で起こっているいじめはすぐにやめさせなければならぬ。まず、具体的な行為や行動が求められるのであり、道徳授業においてもそうしたことを学ばせる必要がある。

道徳的な行為と

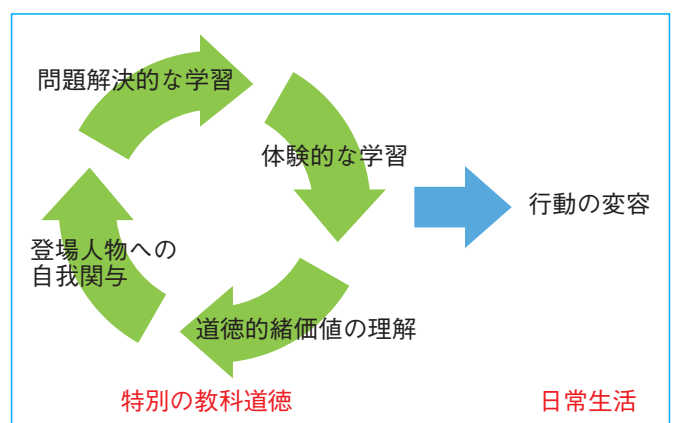
体験的な学習

そのためには、「道徳的な行為に関する体験的な学習」が効

果を発揮するのではないか。ここにいう「体験的な学習」は、授業方法として語られているので、総合的な学習の時間などで行われているような体験活動とは違う。具体的に言えば、役割演技である。あるいは、それを含むスキルトレーニングである。具体的な状況を設定して、子どもたちに演じさせるということである。演じることは、頭で考えるのとはまた違った答えを導き出すことにもなる。また、一度模範的にやったことがあれば、すぐに具体的な行動に移せるというメリットもある。

模範的な行為であれ、実際の行為であれ、最初は、意識していなければできないことも多いだろう。小さな子どもが初めてお年寄りに席を譲ろうとすると、きつとどきどきすることだろう。でも、それを繰り返せば、意識せずに行動化できるようになる。ここでは、行為と行動を区別している。行為は意識して行われるもの、行動は無意識的なものを含めたものとしてとらえていただきたい。

とはいえ、教科化後も、道徳



的価値を教えるということは、道徳教育の根幹にある。具体的な行為や行動の指導をするとしても、そのねらいとして道徳的価値を教えるということを設定しなければならない。その部分で道徳教育となっているかどうかのメルクマールとなる。

こうした体験的な学習を行うことは、道徳授業を、学校の教育活動全体を通しての道徳教育へとつなぐことになるのではないか。本音と建て前を分離しない道徳教育になるのではないかとと思う。

「考え議論する道徳」の 具現のために



新潟県上越市立大手町小学校 教諭
朝井 宜人

はじめに

文部科学省は、道徳の教科化に向けて「考え議論する道徳」へ転換する方針を示した。また、アクティブ・ラーニングの視点から「何を教えるか」という知識の質や量の改善とともに「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視し、課題の解決に向けて主体的・協働的に学ぶ指導方法等の充実にも言及している。

私たち教師は、どのような道徳教育がその具現につながるかについて考える時を迎えている。

体験をもとに価値理解を 深める道徳教育

これまでの道徳教育は、学習指導

要領に示された内容項目について、

いかに伝達、教化、形成させるかを考える、いわゆる価値伝達型の授業が多かったと捉えている。それは子どもが受け身の活動になりやすく、結果、道徳性をはぐくむことにはつながりにくい。例えば「思いやり・親切」の大切さを教師がいくら伝えようとしても、子どもがそれを実感的に受け止めることなしでは、その価値は内面化されにくく、生活における実践にはつながっていかない。

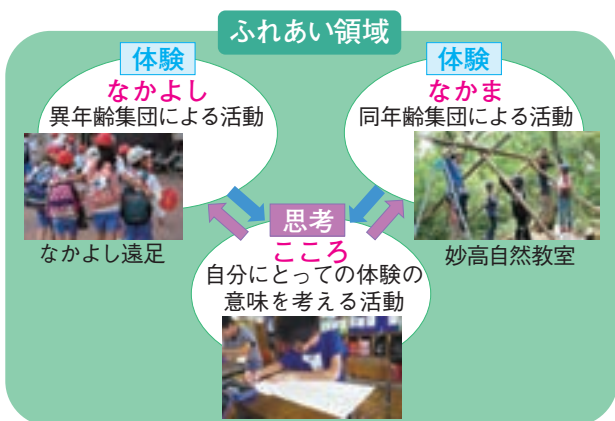
近年、道徳の研究会に足を運ぶと、体験活動と結びつけた道徳教育が多く提案されている。子どもが、道徳的価値を内面化するには、自身の体験をもとにした実感的な価値理解が有効であることを、現場の教師は感

じているのである。

上越市立大手町小学校の 「ふれあい」領域

当校でも、子どもが自身の体験をもとにして、道徳的な価値についての捉えを広げ、生活に生かしていくことを意図した教育活動を行っている。ここでは、その「ふれあい」領域の活動を、事例として紹介する。

「ふれあい」は他者とのかわりの中で、豊かな心情をはぐくむことを目的とする領域である。現実の学校生活を体験の場とし、その前後に、体験における自らの思考や行動を道徳的な価値の視点から振り返る場を意図的・効果的に配置して活動を展開する。



例えば、「なかよし遠足（縦割り班遠足）」や「大手子どもまつり（文化祭）」といった異年齢集団で取り組む活動、6学年のマーチングバンドや5学年の妙高自然教室のように同年齢集団で取り組む活動、いずれも子どもが目的意識を高めながら、思いや願いをもって取り組む活動である。子どもが本気になって取り組む活動だからこそ、そこには解決すべき問題が生じる。

当校では、体験活動の場に位置付けた「なかよし」「なかま」の、どの場面でもどのような問題に出会うかを見通して単元をつくる。そして、活動における子どもの状態を捉え、

問題が生じたところで道徳的な価値に向き合う問いを投げかける。つまり、「こころ」の時間は、それまで自分がどう考え、どうかかわってきただかについて振り返る時間となる。子どもは、意見交流を通して多様な考えに触れ、道徳的な価値について の捉えを広げたり、自身の在り方を見つめ直したりする。

「こころ」の時間の後も、「なかよし」「なかま」の活動は継続するため、自身の考えの広がりが、活動の場のかかわりの変化となって表出しやすく、その変化を自身の成長として自覚しやすい。

【事例】5年生ふれあい領域「心を一つに」の意味を深める

当校のマーチングバンド（以後MB）は、5年の3学期から学年全員で取り組む。6年から楽器の扱い方や演奏の仕方を教えてもらい、2月の移杖式で6年から正式に引き継がれる。その後、運動会や上越まつりなど、いくつかの発表の場を経て、次の学年に引き継ぐまでの約1年の活動となる。

活動を通して、楽器とともに引き継いだ「心を一つに」という言葉の

意味を考え続けることで、信頼し合い喜びを分かち合える子どもをはぐくむことをねらう。

移杖式の前、6年との合同練習を終えた後の振り返りで、子どもは「心を一つに」の意味を「動きをそろえること」「音をしっかりと出すこと」などと書き、技術面で全員がそろえることや自分の役割を果たすことという意味で捉えていた。



た移杖式当日。「6年に負けない演奏をしたい」「伝統を引き継ぐため

に恥ずかしくない演奏をしたい」と気持ちを高めて演奏・演技を行う。それは、今までで一番うまくいったと感じられるものとなり、やり遂げた充実感と満足そうな表情であふれる。

翌日、演奏のビデオをみながら振り返りの場をもつ。「よくできた」「音・動きがそろっている」など肯定的な発言が多数。「音を外した」「そろえられなかった」という発言もあるが、1か月でここまでできれば十分といった意見で、否定的な雰囲気はなくなった。

ここで担任は、理美さんに発言を促した。理美さんは、移杖式に向けて休み時間も練習を重ねてきた子だが、インフルエンザのため移杖式に参加できなかった子である。それまで黙っていた理美さんは「私だつて移杖式に出たかった」と言つて泣き崩れてしまう。

その発言を聞いた瞬間、周りの子は息を飲む。理美さんの姿に涙した彩音さんは、その日、次のように作文を書いた。「動きを合わせる心が心を一つに思っていたけど、全員が参加することが、心を一つに

することじゃないのかな。全員で一つのことをすることだと思えます」学年全員のことを思いやりながら演奏することが「心を一つに」することだという捉えが生まれたのである。

その後も、活動に合わせて「心を一つに」という言葉を視点にMB活動がどうあるべきかを繰り返し話し合う。そして「一つの目標に向かつて演奏すること」「みんなが本気で取り組むこと」など、その捉えを広げていった。このことは、自分の在り方を見つめることであり、集団の一人として、一人一人の行動の変化につながっていったことは言うまでもない。

おわりに

学習指導要領解説では、「問題解決的な活動」「道徳的行為に関する体験的な学習等を取り入れる」「特別活動等の多様な実践活動等を生かす」といった学習方法の工夫の視点が述べられている。ここで紹介した事例は、そのうちの一例ではないが、私は、今後も、子どもが自らの経験をもとに価値の捉えを広げていくことを支える道徳教育を大切にしていきたい。



実践活動

⑦ワークショップ7「CMで表現しようⅡ」

⑧ワークショップ8「キンボールを楽しむ」

(7) 第8回研修会 (9/17) 講話「志を高く持って生きる」講師：前国士舘大学学長三浦信行氏

講話内容：吉田松陰の松下村塾から輩出した明治維新の中核となった人物を取り上げて、志を持って生きることの大切さを話された。

(8) 第9回研修会 (10/1) 実践活動：矢本駅前周辺ゴミ拾い活動（約40名の参加で、明るい挨拶が交わされ、爽やかな活動であった）

(9) 第10回研修会 (10/15) 体験活動：茶道を日常生活に生かす 講師：石田邦子氏（茶道表千家教授）講話内容：茶道におけるおもてなしの心について「一期一会」などの言葉を引用して丁寧なお話をいただいた。

(10) 第11回研修会 (11/19) 1年間の振り返りと今後の抱負、卒業式（35名に修了証授与）、参加者は運営委員も含めて約70名であった。

成果と課題

(1) 成果

①第5期は塾生の数も38名と増え、中学生（17名）と高校生（21名）のバランスも良く、充

実した活動ができた。

②講話では、震災復興に携わる方や前大学学長など多彩な顔ぶれであり、多様な学びができた。

③班活動や塾生と指導委員との対話を重視したことにより、コミュニケーションが深まり、楽しい雰囲気の中で活動することができた。

④講話や討論を継続することにより、自分の考えを述べたり、話し合いを建設的にまとめたりするなど、塾生の顕著な成長がみられた。

⑤実践活動では、家族や友人、市民の参加が増え、『耕人塾』の取り組みが徐々に石巻地域全体に浸透しつつある。

(2) 課題

①指導補助員である大学生は、遠距離の問題や教育実習などで半数以下の出席であった。

②講話と実践活動・体験活動のバランスや活動時期について見直す必要がある。

③日本の伝統文化学習は茶道の体験活動として定着したが、武道の体験ができなかった。

④他団体とのコラボレーションを考えた活動も計画していく必要がある。

まとめ

第5期『耕人塾』は多くの方々のご理解とご支援のおかげで、これまで以上に充実した活動を行うことができた。趣旨である「中・高校生の人間力を磨き、地域や社会に貢献する人材の育成」が徐々に達成されつつあると実感している。また、『耕人塾』での「挨拶・清掃・ゴミ拾い」の実践活動に参加する人も多くなり、石巻地域全体に浸透しつつある。第6期の『耕人塾』をさらに充実したものにし、「世界に誇れる石巻地域」にしていきたいと思っている。



『耕人塾』で中・高校生の「人間力」を磨き、 地域や社会に貢献する人材育成

石巻地域が東日本大震災から真の復興を果たすためには人材育成が急務であると考え、平成24年6月から準備し、中・高校生の「人間力」を磨き、地域や社会に貢献する人材育成を目指して10月に『耕人塾』を立ち上げた。現在5期目を実践中である。今年度は塾生38名、運営委員16名、指導委員26名、指導補助員（大学生）9名、協力者13名、協賛企業35社、個人15人に拡大し、5年間で述べ約500人の方々が『耕人塾』に係わり、大学生や市民を巻き込んだ学びの場に成長しつつある。平成28年度の活動を中心に紹介したい。

耕人塾 塾長 木村 民男（石巻専修大学人間学部教授）



趣旨・指導方針・活動方針

- (1) **趣旨** 石巻地域の中・高校生の人間力を磨き、地域や社会に貢献する人材を育成し、併せて大学生や市民を巻き込んだ学びの場とする。
- (2) **指導指針**
 - ①社会貢献への高い志を持たせ、討論や実践活動を通して、人間力を向上させる。
 - ②「文・部・楽三道（学問・武道・スポーツや趣味）」の体験を通して、人間的な幅と深さを身に付けさせる。
 - ③日本の伝統文化を体験させ、自然や郷土を愛する心を育て、礼儀作法を身に付けさせる。
- (3) **活動方針**
 - ①高い志を持ったリーダー育成を目指す。
 - ②地域に学び、地域や社会に貢献する人材育成を目指す。
 - ③塾生の主体的な考えを生かした実践活動を取り入れる。
 - ④中・高校生のみならず大学生や市民の学びの場とする。

研修・実践活動の様子

- (1) **第1回研修会（6/18）** テーマ「世界に誇れる石巻地域にしようパート2」～世界に誇れる「挨拶・清掃・ゴミ拾い」を目指して～
 - ①出会いの集い
 - ②講話「石巻を見つめて」講師：鈴木省一氏（写真家、漁師見習い）講話内容：震災後東京からボランティアとして石巻に来て、震災復興に関わり、石巻の風景を撮り続けている。石巻の人

にもっと古さと石巻を見つめてほしいとのメッセージを送られた。

- ③班別学習、全体学習
- (2) **第2回研修会（6/25）** 実践活動：石巻駅前～立町～中瀬公園のゴミ拾い活動、活動内容：霧雨の中、立町商店街の方々も含めて67名の参加であった。
- (3) **第3回研修会（7/16）**
 - ①これまでの実践活動の振り返り
 - ②講話：「私の人生を変えたボランティア～活かし、活かされる関係づくり～」講師：岩本暁子氏（石巻復興きずな新聞舎代表）、講話内容：東京で通訳をしていたが、東日本大震災後に石巻の復興ボランティアとして「仮設きずな新聞」を発行し続けてきた苦労と喜びについて話された。
 - ③全体学習
- (4) **第4回研修会（7/23）** 実践活動：女川駅前周辺ゴミ拾い（約40名参加し、心地よい海風のなかでゴミ拾いをした）
- (5) **第5回研修会（8/2）** 実践活動：川開き後のゴミ拾い、中瀬公園周辺（5:30から約60名の参加、他団体とも協力し、2時間程できれいになった）
- (6) **第6,7回研修会（8/11,12）** 宿泊研修（土田畑村）
 - ①ワークショップ1「挨拶を極めよう」
 - ②ワークショップ2「世界に一つだけの歌をつくらう」講師：猪狩太志氏（音楽プロデューサー）
 - ③ワークショップ3「カレーを極める」
 - ④ワークショップ4「CMで表現しようI」
 - ⑤ワークショップ5「夜を楽しむ」
 - ⑥ワークショップ6「挨拶・清掃・ゴミ拾いの実



▲「この取り組みは、以下の3つを重視して実施しています。1つ目は少人数での取り組みではなく多数での取り組みにしていること。2つ目は子どもたちの発想や意見を重視すること。3つ目は活動を継続させるためにDJ風のTKR放送・一発芸大会・けん玉チャンピオン決定戦などの楽しく能動的な仕掛けがあること。」と校長先生。

東京都足立区立辰沼小学校

命を守る教育

「いじめを、しない! させない! ゆるさない!」
「いじめを、しない! させない! 許さない!」を合言葉に「子どもたちの、子どもたちによる、子どもたちのためのいじめ防止隊」に参加し、成長していく取り組みをご紹介します。

—子どもたちによるいじめ防止活動—

東京都足立区の区立辰沼小学校（仲野繁校長先生、児童数450名、1978年開校）では、2012年から辰沼キッズレスキュー（略称TKR）による、自由参加で楽しく取り組むいじめ防止活動を行っています。200名以上の児童が「いじめを、しない! させない! 許さない!」を合言葉に「子どもたちの、子どもたちによる、子どもたちのためのいじめ防止隊」に参加し、成長していく取り組みをご紹介します。

安心できる楽しい学校に

辰沼小のいじめ防止教育は、平成24年に大津市で起きた中1自死事件をきっかけに始まりました。

仲野繁校長先生にお話を伺いました。

「学校で子どもたちに、事件についてどう思うかと聞いたら、多くの子どもたちが『いじめの解決よりも、防止をして欲しい』と言いました。子どもたちが安心していじめを止められる環境を作り、子ども主体の取り組みによって自尊心を高め、いじめを防止することがこの活動の目的

です」。

校長先生はまず、4年生以上の児童会役員たちに相談し、いじめ防止団体「辰沼キッズレスキュー（略称TKR）」を結成しました。TKR発足式では、22名の隊員が体育館の壇上から「いじめをなくすために立ち上がろう!」と呼びかけ、約200名の子どもたちが参加しました。

子どもたちの意見を 真剣に聴く

子どもたちの「いじめは絶対にしてはいけない」という気持ちを可

▼TKRは自由参加・自由脱退。シンボルの『ゆるキャラ』は、辰沼+ハッピーで辰ビーといいます。姿も名前もテーマ曲も、全校児童に応募をかけた作りしました。数か月に1回テーマ曲とともに出現すると学校中が大騒ぎになります。



▲歴史好きな児童の「TKRの活動は世の中が大きく変わった明治維新のようなものだから、新撰組のノリで作らしましょう」という提案で、新撰組の「局中法度」を参考にした隊規も作りしました。

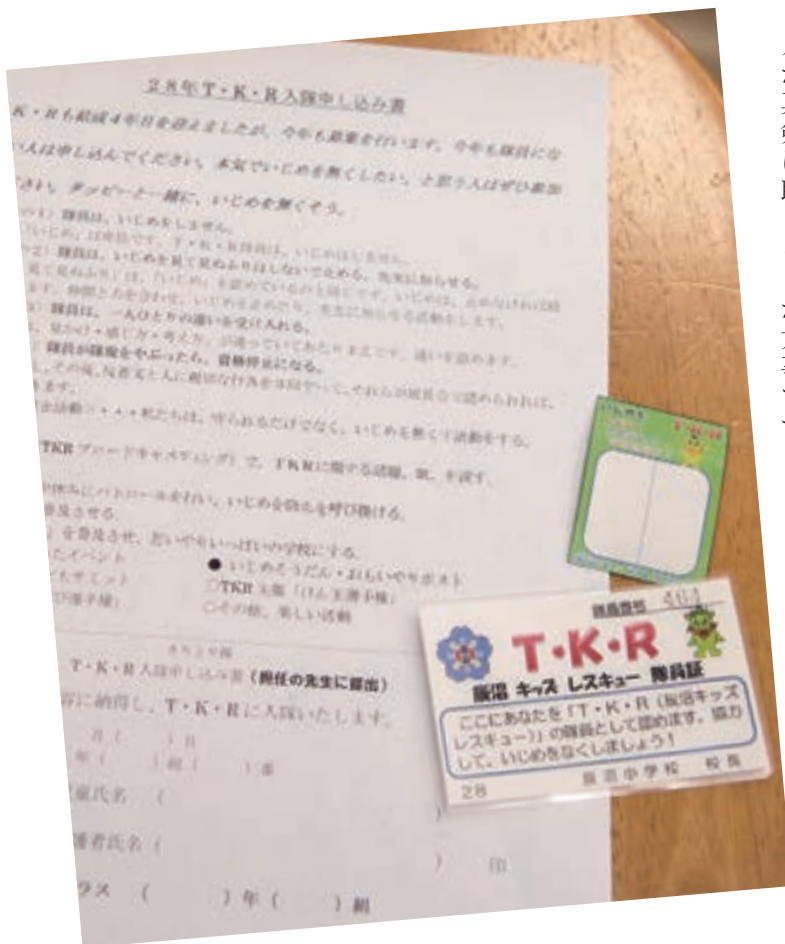
視化し、いじめづらくするために、休み時間に20〜30名の隊員たちが校内をパトロールします。また、昼の校内放送「TKRブロードキャスティング」では、担当の子どもたちがディスクジョッキー風に校内での出来事などを楽しくお知らせする他、いじめ関連のニュースなども紹介しています。

「傍観者」がいなくなったことでいじめトラブルはなくなりました。「まず子どもたちの意見や事情を大人が真剣に聴くことが大事です。

小さな行動の積み重ねにより、大人の本気の姿勢が子どもたちに伝わるのです」と校長先生。

子どもたちの主体性を尊重し、いじめ事前防止を実現して、みんなで学び合い、助け合い、楽しみながら成長していく取り組みにより、辰沼小の子どもたちは「明日へ向かえる力」を育んでいきます。

◀辰沼キッズレスキュー隊員証。「協力して、いじめをなくしましょう！」



全国各地のさまざまな取り組みを紹介します。

本校は、守谷市の教育目標である「世界に輝く人づくり」を目指し、守谷型保幼小中高一貫教育「きらめきプロジェクト」の推進のため、一貫校との連携を図り、中学校区の目標「夢に向かって自ら学び続ける心豊かなたくましい児童生徒の育成」を目指している。さらに、創立142年という長い歴史の学校の強みを活かし、「元気な返事！人や学校のために役に立つ！積極的に話をする！」を合い言葉に、地域の活力と愛校心に支えられながら日々の教育活動に取り組んでいる。

一貫校との連携の一つに、道徳の授業などで意見交換を実施している。思いやりの心を育てる授業では、「思いやりの木」に、自分の考えや学級の思いを木に書き込み、それを一貫校で共有することで、他の小学生や中学生の考えを知り、新たな気付きや成長を発見することができた。また、9年間を見通した学びのプランを基

に指導を行い、生活面では、市の「守谷しぐさ」の自校化を図り、相手を思いやる生活行動や所作の学習を進めている。

地域力を活用した特徴的な取り組みとして、本校には31年前から続く保護者のボランティアが運営する高野文庫がある。図書室とは違い、推理小説やSFなど子供たちの好きな本がたくさんあり、貸出日には4冊、5冊と借りる児童もおり、茨城県が推奨する年間50冊の本の読破を全校児童全員が達成している。また、6年生のキャリア教育「いろいろな職業を知ろう」でも、保護者がコーディネーターとなり、地域の人々の協力で成り立っている。医師、寿司職人、研究者、ファッションデザイナーなどさまざまな職種の方たちに来てもらい、仕事の内容や小学生へのメッセージを聞くことができた。



茨城

「元気な返事！人や学校のために役に立つ！積極的に話をする！」を合い言葉に

守谷市立高野小学校 校長 椎名 和良

南から



わたしたち『学びの上所小』では、今、子どもたちの未来や社会との関わり方を考え、その実現を目指す教育課程づくりを進めています。これまでの取組を通して、子どもたちには「夢の描き方」を、教師・保護者や地域の方々には「夢の育み方」を、それぞれ学ぶ必要があるということに気がきました。

そして、私たちは、学校づくり・授業づくりを通して、子どもたちに、「対話・協働」のすばらしさや、よりよく生きるために必要な「納得解」の導き方・社会性の大切さを感じさせ、その学びを通して、子どもたちに潤いのある「自分のライフプラン」を築けるようになってほしいと切望しています。私たち『学びの上所小』の目指す「学びを生かす子ども」の育成は、受け身でない学校づくり、授業づくりから始まります。その具体を紹介いたします。

1 学校づくり…児童の有志による、地域交流委員会の活動

地域との協働による「夏まつり」企画に児童が企画段階から関与していきます。さらに、こ

の活動が、地域・保護者・教職員・児童による「学校フォーラム」開催につながっています。

2 授業づくり1…パフォーマンス課題を位置付けた単元構想と実践

学んだことを生かすという意図的なしなかけをもつ課題を単元の節目に設け、その解決を通して学んだことを価値付けていきます。

3 授業づくり2…地域教育プログラムの教育課程への組入

地域の課題解決を、総合的な学習の時間や教科などの時間で取り扱い、子どもたちにとっても地域にとっても価値ある活動にしていきます。この活動を通して、「生き方」を追求させていきます。

みなさん、「夢の描き方」「夢の育み方」をいっしょに考えませんか。ぜひ、HP (<http://www.niigata-kamitokoro-e.city-niigata.ed.jp>) にアクセスください。



新潟

『学びの上所小』の未来図描画

新潟市立上所小学校 校長 遠藤 英和

愛知

郷土愛を育てるご当地検定 ―『津島の達人ジュニア歴史検定・選手権』―

津島市立南小学校 校長 浅井 厚視

1 津島の達人ジュニア歴史検定・選手権とは

まちおこし（観光）を目的としたご当地検定は、ブームが終わり、熱が冷めてきた感があります。津島市では、郷土愛を育てるため、このご当地検定のジュニア版を作成し、小学校6年生全員に取り組みさせています。

『津島の達人歴史検定』（一般向）は平成21年度から、津島商工会議所・NPO法人まちづくり津島・津島市教育委員会がコラボして実施してきました。地域の通史として、また観光ガイドとして楽しむことのできる公式テキストも作成しました。この年から現在まで、ご当地検定を実施し、毎年80人～100人の歴史マニアの受検があります。

平成22年度から、歴史好きな社会科教師が『津島の達人ジュニア歴史検定』の公式テキストを作り、津島法人会の協力を得て、市内12の小中学校に50冊ずつ配布しました。こうして平成22年度より市内の小学校6年生全員が受検する検定が始まり、平成23年度からは、更に学習したい児童のため『津島の達人ジュニア選手権』という番組を、地域のケーブルテレビ局と制作してきました。

2 津島の達人ジュニア歴史検定出前授業（地域学習研修会）

このジュニア歴史検定のため、出前授業を実

施しています。検定の2～3週間前に行い、本物の歴史資料（弥生土器・寺子屋教科書）を見たりさわったりします。平成27年度から、津島市教委が6年生の担任教師のために地域学習研修会も開催し、まずは担任の先生に津島の良さを分かっていただくことにしました。



福岡

放課後に楽しく英語を学び、 国際的な人材を育成！

なかもっ子放課後イングリッシュスクール

中間市は福岡県北部に位置し、政令指定都市である北九州市の西側に隣接し、世界遺産（遠賀川水源地ポンプ室）のある、また、映画俳優の高倉健さんやプロ野球監督の仰木彬さんを輩出した、面積約16km²のコンパクトなまちです。市内には、小学校6校、中学校4校があり、約3,000人の児童生徒が通っています。

本市では、平成28年度から放課後対策として「なかもっ子放課後イングリッシュスクール」を開校しました。この取り組みは、市内の子どもたちに安全で安心な活動拠点を設けること、学習機会を提供することを主な目的としながら、今後さらに進んでいくグローバル化や英語教育の早期化に対応し、国際的な人材を育成するために実施しています。

スクールは、市内小学校に通う5・6年生の希望者を対象として、各小学校において週1回、放課後45分程度行い、費用は無料で、現在約250名の児童が参加しています。

講師は、市内のNPO法人に業務委託をして、ネイティブスピーカーの外国人講師と日本人のアシスタントが学習の支援を行います。

活動内容は、基本的に全て英語で進行し、カードに示された色や動物などを英語で言ったり、英語をリズムカルに受け答えるなどのゲームを行いながら、積極的に外国人講師とのコミュニケーションを通して、異文化に触れ、英語に

慣れ親しみ、楽しみながら英語を学べる内容になっています。また、アルファベットを書いたり、簡単な英単語を読んだりする活動も取り入れ、次期学習指導要領の内容に対応できるようにしています。

このほかにも、中間市教育委員会では、夏休みに開催される「イングリッシュキャンプ」や英検をワンコイン（500円）で受験できる「なかもっ子チャレンジ英検補助事業」などを実施しており、グローバル化や英語教育の早期化への対応を着実に進めています。



第14回 地球となかよし メッセージ

熊本大地震、台風、雨続き・高温続きの1年でした。この厳しい1年を、子どもたちは正面から受けとめ、見つめ、表現してくれました。人と人、人と自然、人と社会の「関わり」、中でも「いのち」「生きること」に焦点を合わせてくれたと受けとめています。 評：審査委員長・児島邦宏

入賞作品発表

◎協賛／日本環境教育学会 ◎後援／環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞



地球となかよし大賞

地球を守る四大資源

上田 颯真 熊本県 熊本大学教育学部附属小学校 6年

ぼくは、「地球を守る四つの資源」について「地球」を中心としたオブジェにして表しました。一つめは、「緑の森」です。森は、雨を吸収し、たくわえるダム働きをするので「緑のダム」と呼ばれます。二つめは、「赤の太陽」です。太陽は、地球に光と熱を与えています。三つめは、「青の水」です。もし、飲める水が無くなったら、人間は生きていくことができません。四つめは、「地球をとりまく空気」です。空気が汚れてしまうと、人間は健康に生きていくことができません。ぼくは、この四大資源を守るために、森林の伐採や大気汚染を防ぐことが大切で、ぼくたち人間がするべき仕事だと思えます。



評 「緑の森」「赤い太陽」「青の水」「透明な空気」にガードされた地球を、しっかりと守る強い意志が、みごとに表現されています。

ツバメに借家

西原 嘉海 東京都 板橋区立高島第三中学校 1年



環境大臣賞



去年から、うちの外灯の上にツバメが巣を作るようになりました。実はツバメが下見に来た時、巣を作らせないようにビニールをかぶせました。しかし、新聞で「都市部のツバメの子育て受難」の記事を読み、ビニールはずしました。ふんで玄関が汚れないように外灯にラップをかけ、下にカゴをつけ、新聞紙をひいて受け入れました。ヒナの成長を観察、見守ることができてとても幸せな気分になりました。

評 ツバメは幸せを運んでくれる鳥です。春を告げ、空中で害虫を捕ってくれます。そのツバメの命をつないでくれた心に拍手します。

台風のおくりもの

今井 治志 埼玉県 本庄市立本庄東小学校 3年

日本環境
教育学会賞

台風がやってきた 風と雨の大あらし
はやくすぎされ台風よ はやくすぎされ台風よ
ようやくさったそのあとに 大きな大きな にじふたつ
きらきらかがやく七色アーチ あっというまにぎえちゃった
台風からのおくりもの「ごめんね」のおくりもの



評 台風の去った空に、大きなにじふたつ。それを台風のおくりものと受けとめる大らかな自然の心。「なかよし」とはこのことですね。



全国小中学校
環境教育研究会賞

地球に手をさしのべて

植原 花弥 兵庫県 加古川市立平岡中学校 3年

地球温暖化の原因は人間にあると思います。守るのも、汚すのも人間。ならば、私は私たちが地球を守りたいと思います。だれかではなく、まずは自分から行動すべきだと思います。地球に恩返しするつもりで地球温暖化がこれ以上進まないように、できることからコツコツしていきたいです。

評 「地球への恩返し」「私が地球を守る」という、自分と地球とが向き合う決意。これからの自己の生き方が込められています。

毎日新聞社賞

ちきゅうとともにだち

松田 一求 シカゴ日本人学校 1年

ぼくはいっきゅう、あなたはちきゅう。ぼくはちきゅうとともにだちです。なぜなら、ちきゅうはぼくたちをいきさせてくれているからです。ぼくもちきゅうをまもりまします。だからともだちです。だけどせんそうはちきゅうをよごします。だからせんそうはやめたほうがいいとおもいます。ちきゅうはだいじです。なぜなら、もし、ちきゅうがほろびると、ぼくたちもきえてしまうからです。だからちきゅうをまもりまします。そして、ともだちです。



評 一求くんは地球の友だち、それ以上に一心同体です。一求くんの心は地球の心、未来です。地球を守る強い気持ちが伝わってきます。



毎日小学生
新聞賞

ピカピカのいのち

下戸 良佑 鹿児島県 湧水町立轟小学校 2年

ぼくは、生まれてはじめて、せみがおとなになるところを見ました。今までせみのぬげがらは、見たことがあったけど、こんなきれいなのが出てくるなんて知りませんでした。白くてすきとおっていて、いのちのほうせきみたいでした。そおとさわってみたら、ぶにゅとしていました。なんだかこわれそうなのでぼくは、どきどきしました。

評 「いのちのほうせき」「こわれそうな」いのちにどきどきしているあなたに、ピカピカのあなたの心のやさしさがあふれています。



命
山中 海夢 東京都 世田谷区立下北沢小学校 5年

ずっとほしかった妹が私の誕生日にお母さんのおなかの中にやってきた。赤ちゃんが生まれるまでには、つわりなど、とても大変なつらさがあることも知った。また、出産にも立ち会った。想像していた以上、表現できないほどお母さんは苦しんで、赤ちゃんを生んだ。もし自分だったら、たえられていないと思う。赤ちゃんが生まれて、家族の中で一番に私が、だっこした。お母さん、生んでくれてありがとう、という気持ちでいっぱいになった。私には、大切な大切な宝物、妹ができた。命をかけて生んでくれたから、今がある。

評 生まれ出ずることの喜びと苦しみ、期待と祈りがあふれています。何よりも命の誕生の神々しさに、つい涙ぐんでしまいます。



福岡県 **大牟田市立吉野小学校**



世界は友達

4年 **吉田 光来**

わたしは、ようち園の時に、ロシアや、ブラジルや、ニュージーランドの人と出会いました。目の色やかみの毛や国によって気温もちがっていることも知りました。世界には、たくさんの国があることをお母さんからおしえてもらいました。だけど、おなじ友達としてすごしていました。だからわたしは、世界の人たちとなかよくできるといいなと思いました。



自ぜんや生き物を守ろう

4年 **中山 蒼唯**

わたしが自ぜんや生き物を守りたいわけは、吉野小のピオトップにいろいろな植物や生き物がたくさんいるからです。そして池の中には、黒メダカや外らい種のカダヤシがいます。でも黒メダカたまごをカダヤシが食べてしまい、黒メダカが少なくなっています。だから、カダヤシを少しとって育てています。植物は、ざっ草をとったり、池の中のものをとったりして自ぜんを守っています。これからも、自ぜんや生き物を守りたいです。

入選作品



ぼくといっしょに大きくなった

高野 大馳
 東京都 荒川区立瑞光小学校 1年

ぼくがうまれたとき、さくらの木をうえた。なまえはよっちゃんです。よっちゃんはぼくと大きくなった。さいしょはほそかったけど、ふとくなりました。これからもずっといっしょです。

◎審査委員(敬称略)

- 角屋 重樹 日本体育大学教授
- 児島 邦宏 東京学芸大学名誉教授
- 小玉 敏也 日本環境教育学会理事
麻布大学教授
- 小山 成志 全国小中学校環境教育研究会会長
千葉県富里市立根木名小学校校長
- 辻 恵一 環境省環境教育推進室室長補佐
- 戸澤 美佐 毎日新聞社「教育と新聞」推進本部
教育事業担当部長
- 山崎富士雄 教育出版株式会社代表取締役社長
- 小島 正利 教育出版株式会社専務取締役

ぼくが伝える地域のおどり

下戸悠太郎

鹿児島県 湧水町立轟小学校 4年



ぼくは今年、地域の郷土芸のうの「ぼうおどり」の練習をしている。ぼくの背と同じくらのぼうを持って「こらまたずし。そいやそいそい。」とっておどる。歌に合わせて四人一組でおどるのだが、失敗すると、ぼうで打たれて痛いし、なかなかむずかしい。でも練習は楽しい。ぼく

を入れて地域に住む小学生は九人。でも、地域に住むみんなが家族のようにやさしい。その人達が教えてくださるから楽しいのかもしれない。そして、地域みんなが昔からおどり、受けつがれてきたこのぼうおどりを、かんべきにおどれるようになって、おじいちゃんおばあちゃん達を喜ばせたい。みんな楽しみにしててね。ぼく、きばっからね。

やさしかったベドウィン

山田小治郎 台北日本人学校 2年



ベドウィンとは、さばくにすんでいる人びとです。ぼくは、今年ヨルダンという国に行き、さばくでキャンプをしました。そのときに、ベドウィンの家々におせわになりました。さばくでは、ベドウィンの人たちにらくだに乗せてもらいました。見たことがないくらい、きれいな星空も見せてもらいました。ベドウィンの人たちは、とても親切でした。子どもたちとも友だちになりました。空きかでサッカーをしたり、トランプであそんだりしました。言葉がつかないのに、すくなくなれました。あそんでいるときに、おばさんがイチゴ味のコーラとリンゴを出してくれました。あつかったので、とてもおいしかったです。今、ヨルダンは来る人が少なくなっているそうです。ぼくは、たくさんの人にヨルダンに来てほしいなと思いました。やさしいベドウィンの人たちに会ってほしいです。

小さな芽が出たよ

片瀬 由里

愛知県 武豊町立緑丘小学校 4年



ドングリの芽が出ました。親のドングリの木の近くで、小さな小さな芽が出たよ。この芽が大きくなって、またドングリを落とすには何十年もかかるそうです。

わたしがおばあちゃんになったら、ドングリはわたしの背よりもずっと大きくなって、立派なドングリをたくさんつけるのかな。そう思うと楽しみです。そしてまた、たくさんのドングリが落ちて、芽を出します。森はこうやって大きくなっていくのかな。人間よりずっと長生きする木は、すごい力を持っていると思います。わたしはドングリをみながら、いっしょに成長をしていきたいと思います。

にわのどうぶつ

牧田 桜典

パトルクリーク補習授業校 2年



ぼくのお家のうらにわには、たく山のどうぶつがすんでいます。せみが木に鳴いています。かえるが花だんの中でとんでいます。ぱったが草の上をとんでいます。くもがぶらんこの中にすんでいます。くわがたが木にのぼっています。とんぼが草の上をとんでいます。ほかにまだまだいます。

みんなのいのり

藤木美哉子

東京都 世田谷区立中里小学校 6年



これは、私が広島の実験ドームでとった写真です。折り紙で作られたつるを使い作ってある作品です。色々なところから送られています。佐々木禎子という人が、12歳で被爆したことで同じ小学校の人たちが戦争でなくなった人たちに、像を立てました。それをきっかけに

日本全国からつるで作られた作品が送られてきたのです。そして最近では、オバマ大統領が広島へ行き、核兵器を世界中でなくすためにスピーチをしに来っていました。つるを折ってくれたそうです。作品もオバマ大統領も、核兵器はあってはいけないという気持ちが一つになったのかなと思いました。

空からの贈り物

長島 志珠

東京都 千代田区立 神田一橋中学校 2年



私の住む町には神田川が流れています。いつも何気なく通り過ぎていますが、季節の変わり目には季節のにおいを感じます。私は夏休みに、いつも通る神田川の上でとても素敵な贈り物をもらいました。その日は夏独特の、急な大雨が降った日でした。駅まで急ぎ足で歩いていると、大人たちがたくさん橋の上で空を見上げていました。つられて私も空を見上げると、見たことのない大きな虹が神田川の上を彩っていました。あまりにも大きくて、くっきりとしてきれいで、思わず「わ!!」と声をだしてしまいました。私は雨が嫌いでしたが、こんな素敵な贈り物をもらおうと雨もいいものだなと思いました。空にどんなお返しができるか？ 考えていきたいです。

森を食べる植物～腐生植物 数々の謎

東京大学大学院理学系研究科教授 塚谷 裕一

▼写真 1



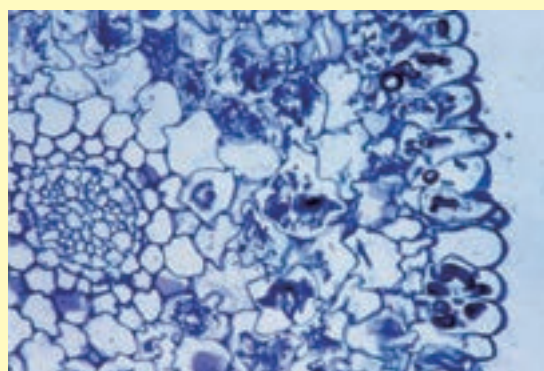
▲写真 2-1

その花は、奇妙な形をしていることが珍しくない(写真2-1)。これには、葉を作ることを止めた結果として、花の形を自由に作れるようになった可能性がある。というのも、花を構成する要素である萼片、花弁、雄しべといった器官は、もともと葉を変形させた器

腐生植物は前回紹介したとおり、森を食べて暮らしているため、光合成の能力を失っており、緑の色素・クロロフィル(葉緑素)を持たないし、葉を大きくひろげることもない。ほとんどの種類で葉は鱗片状に退化している。

その色彩は純白、茶色、青、赤、黄色など多様である(写真1…ボルネオ産の腐生植物 *Thesium betung-keihunensis*)。花が咲く植物なので、花に虫を呼ぶ種類もあり、そうしたものではありません。鮮やかな色彩を持つことが多い。一方、カビやキノコのような菌類を栄養源にしている関係上、森の奥の暗いところに暮らす種類も多く、そうしたものは生育環境が飛翔昆虫にとって馴染みのないところであるため、花に虫を呼ぶことを止めてしまい、自家受粉で種子をつくることにしているものもある。

官。そのため花の形や大きさは、その植物の葉の形や大きさに引きずられる傾向がある。葉の形やサイズは、その植物が暮らす環境でもっともよく太陽光を吸収できるように最適化されているため、それほど自由には変えられない。腐生植物は、そういう制約をもたないため、花の形をより自由に進化させ得たのだろう。自ら苦労して光合成をしなくてもよい関係上、資源を節約しなくてすむというのも、形の制約が少ない1要因かも知れない。



▲写真 2-2

当に特定の種類の菌しか相手にできない種類もいれば、かなり広い範囲のいろいろな種類を栄養源とする腐生植物もある。しかしどうやって？ まだまだその生態は謎に満ちているのである。

それもそのはず、前回触れたように、腐生植物は花を咲かせ果実を实らせる器官を別にすれば、ほぼ一生を地下で暮らす植物だ。視覚に頼ってものを認識する人間にとって、その存在を感覚しにくい植物である。そのため、海外の人類未踏の地のみならず、日本のように、植物の戸籍調べが徹底して行われた地域ですら、いまだに新種の腐生植物が次々と見つかる。

したがって、野外の植物に関心を持ち始めた子どもがいたとすれば、まず最初にお勧めすべきは、腐生植物である。近くの森で偶然、新種の腐生植物を発見できるかも知れない。その探し方については拙著『森を食べる植物』(岩波書店)でどうぞ。

塚谷 裕一(つかや ひろかず)

1964年生まれ。1993年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、博士(理学)、東京大学分子細胞生物学研究所助手、自然科学研究機構 基礎生物学研究所助教授を経て、東京大学大学院理学系研究科教授(現職)。放送大学客員教授、自然科学研究機構・岡崎統合バイオサイエンスセンター客員教授を併任。著書に『植物のこころ』(岩波新書)、『スキマの植物図鑑』(中公新書)、『変わる植物学 広がる植物学』(東京大学出版会)などがある。

高大接続改革について ～新テストなど大学入試改革を中心に～（第1回）



独立行政法人
大学入試センター理事
副所長 伯井 美徳
(前 文部科学省大臣官房審議官
高大接続・初等中等教育局担当)

2020年度から大学入試センター試験は大幅に変わる。既に国公私立大学の個別選抜は、多面的・総合的な評価へと改革がなされつつある。高大接続改革の一環として高校教育と大学教育をつなぐ大学入試改革が、今まさに進行中である。

本コラムでは、3回にわたり、何のための改革か、大学入試の何をどう変えようとしているのかについて、新テストの検討状況なども適宜、紹介しながら説明することとしたい。

今、なぜ大学入試改革が求められるのか？

このことは、今進められている教育改革全体の文脈の中で入試改革を捉えてみると理解しやすい。高大接続改革や学習指導要領改訂で行おうとしている「学びの改革」は、新たな時代の創り手として必要な資質・能力の育成を目標としている。それは、急激な社会変化の中、未来の創り手となるために必要な資質・能力を備え、自立して社会に貢献する人材を育成することである。今次教育改革は、「学力の三要素」(①知識・技能 ②思考力・判断力・表現力 ③主体性・協働して学ぶ態度)をバランスよく育むことを目指しており、そのため、受け身の学びではなく、主体的な学び・深い学びをより一層促していくことを求めている。

しかしながら、高校サイドからは、「大学入試が変わらないと高校教育が変わらない」「せっかく高校で探求的に学んでも入試では評価されない」といった声が多く聞こえてくる。中学校に比べ高校では教師からの説明の時間が長く、生徒が考えたり話し合ったりする時間を多くしようという意識が低く、また普通科の成績上位校ほど教師主導の講義形式の授業の比重が高い(2010ベネッセ総合教育研究所調査より 授業時間の使い方でも多くするように特に心がけていると答えた教員の割合「教師からの解説」⇒中24%<高48%「生徒の発言・発表」



⇒中47%>高25%)。高校の授業は、大学入試とセットで改革しないと改善が進まない。大学入試改革による高校以下の教育へのウォッシュバック効果が強く期待されるのである。

一方、18歳人口の減少の中で、「そんなに勉強しなくても大学に入れるなら、まあいいか」という風潮もある。私立大学では、約半数がAO入試、推薦入試で入学している。一部には、いわゆる「学力不問」といった状況も生じており、また、一般入試に比べ、基礎学力が不足していると感じている高校、大学も多い。先進的な総合的・多面的評価を行っている大学入試の事例を普及し、高校時代の多様な教育活動などを書類や面接などを通じて丁寧に審査するという本来の趣旨に即した改善が必要である。さらに言えば、高校生の平均学習時間や読書量は小学生より少ないという現実がある。大学受験圧力の低下による高校生の学習量の低下の連鎖を断ち切り、学習意欲を喚起させる方策も併せて必要である。

繰り返しになるが、高校以下の教育と大学入試はセットで改革を進める必要がある。12月には、学習指導要領改訂のための中教審答申がなされ、2020年度から小学校より順次、実施される。一方、大学入試センター試験に代わる新テストの実施方針は、来年度初頭には公表される見込みだ。今が、まさに一体的改革の絶好のチャンスなのである。

イラスト ひらた ひさこ <http://www.hisako-hirata.com/>

第15回

地球となかよしメッセージ

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会 ◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

教育出版

「地球となかよしメッセージ」事務局

TEL 03-3238-6864 <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>

作品募集
(2017年7月1日
～9月30日)



*第14回(2016年度)作品のお問い合わせについても、「地球となかよしメッセージ」事務局へ。

壁なんて、 もともとないんだよ

自分で選択する人生を



NPO 法人アール・ド・ヴィーヴル（以下「アール」）は、平成25年に誕生しました。「知的障がいがあっても、子どもも大人も自分で選択する人生を送って欲しい」という願いからまずアートワークショップを始め、参加者のご希望でヨガや英会話など、内容が増えていきました。アールのアートディレクター、中津川浩章先生は、子どもたちが今の気持ちで作品に表せるような言葉をかけ、各作品の素晴らしさをみんなで分かち合います。「ここにいと楽しいです」とおっしゃって、ボランティアの方も増えました。

楽しめることを仕事に

養護学校卒業後、知的障がいのある人たちの多くは福祉事業所で内職作業などをします。「彼らが楽しめることを仕事にできないだろうか？」と考え、この就労継続支援B型事業所を作りました。絵画など、事務所で創られた作品は、企業などへリースや販売をし、作品をモチーフとしたステーションナリーを製造販売し収入を得ます。2015年か

らはワークショップで生まれた作品を使ってオーダーメイド名刺を作る「つながるカードプロジェクト」を始めました。2016年の「第18回 城下町おだわらツアーデーマーチ」のポスター製作もし、作品依頼なども増えています。

「できること」に気付く

作品制作での「アウトプット」だけでなく、バレー鑑賞などで美しいものを「インプット」する機会も作りました。写真の作品は、夏休み中に清里高原でバレー公演を観た女の子



が、記憶だけを元に作りました。子どもたちの「できること」に気付くと、すばらしい発見がたくさんあります。

家族が変わると 子どもも変わる

展示会開催時は、レセプションに子どもたちとそのご家族もお招きし、子どもたちに作品について一言ずつ話してもらいます。2016年10月に国立新美術館で開かれた「ここから——アート・デザイン・障害を考える3日間」展では、アールの子どもたちの作品を見て涙する方もいて、それに気付いた作者のご家族が「何か通じるものがあったのだな、有難う」という気持ちになったようです。ご家族の思いが変わると、子どもも変わります。

「壁」なんて、 もともとないんだよ

デパートのイベントで、20人ほどのアールのメンバーが集まり、5メートル四方の画用紙に一気に絵を描くイベントもしました。自紙の上に他の人が絵を描いて泣き出す子もいましたが、「みんなで一緒に描いたから、素晴らしい作品ができたんだよ」と子どもたちが話しかけると納得します。コミュニケーションについて、子どもたちから学ぶことは多いのです。彼らの「できること」に注目すると、「自分にはできないけれど、この人はこんなことができる！」と気付く方がたくさんいます。「障がいによる壁を取り払う」のではなく「壁はもともとない」状態で子どもを育てれば、悲しい事件は起きなくなるのではないのでしょうか。

つながっていくこと

この活動を一般の方知っていただくことはとても大切です。いろいろなものと触れ合う機会が余りない状況で育つと、大人になってから誰かや何かとつながる機会が作れません。だから、こちらから出会いに行くのです。そこから新しい人や仕事につながり、子どもたちを採用する会社も現れるかもしれません。これから子どもたちがどんどん羽ばたいてくれるよう、願っています。

はぎわら みゆき 1995年三重県生まれ
1996年 第一子ダウン症の赤ちゃんを授かる。
日本ダウン症協会神奈川小田原支部ひよこの会長、小田原市教育委員などを歴任。
2013年 NPO 法人アール・ド・ヴィーヴル設立。
◆ <http://artdevivre-odawara.jp/about/>

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆きょういく見聞録の西郷・大久保を育んだ薩摩の「郷中教育」に学ぶは、鹿児島県独特の風土が育んだ青少年の教育について、それが先人に学ぶ活動として受け継がれていること、また、学校教育活動との連携が図られていることなど、とても興味深く読んだ。(福岡県 武末正史)
- ◆巻頭インタビューでのロバートキャンベルさんの話には、納得させられるものが多くあった。「違いを見えないようにする力」は我々日本人の本質を鋭く突く言葉だと感じた。(愛知県 鈴木博志)
- ◆松本先生の「ようやく大きく変わる日本の英語教育」、かつて英語指導主事をやり英検の審査官も十数年してきたわたしにとって、心おどる気持ちで拝読いたしました。(熊本県 植田紘基)

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進歩や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。